

< 口腔の役割 >

歯ブラシ古今東西

日本で最初に作られた歯ブラシは、英国製の歯ブラシをまねて明治5年（1872年）に大阪の角細工商が鯨の髭に馬毛を植えて「鯨楊枝（くじらようじ）」という商品名で売られたものですが、当時はそれほど普及しませんでした。その後、明治の中期に竹の柄に馬毛や豚毛を植えた「竹楊枝」が売り出され、大正に入るとセルロイド製の柄に豚毛等の動物の毛を植えた歯ブラシが全盛となります。当時のヨーロッパやアメリカで広く使用されていた歯ブラシは馬毛が糊付されているだけで、濡れることにより大量に馬毛が抜け落ちたといわれ、ニューヨーク州オールバニの外科医は虫垂炎の原因の多くは安価な歯ブラシが原因と述べていました。「メイド・イン・ジャパン」の歯ブラシは海外で高く評価され、以後、大量に海外へ輸出されることになりました。

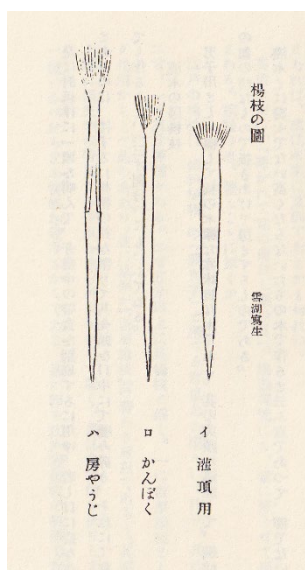
そもそも日本での歯ブラシの起源は6世紀の飛鳥時代にさかのぼり、仏教の伝来とともに伝えられた「歯木（しばく）」が由来になります。歯木は楊柳（ようりゅう：ヤナギ）の小枝で現在の「楊枝（ようじ）」の語源にもなっています。歯木による歯磨きは僧侶、公家、武家などの上流階級で行われましたが、江戸時代中期に歯木は房（ふさ）楊枝に発展、商品化され、庶民にも普及しました。

中国では早い段階ですでに牛の角の柄で馬毛を植えた現在の歯ブラシの原型となるものを発明し、シルクロードを経てヨーロッパに普及していましたが、日本において歯ブラシは明治の終わりごろまで普及しませんでした。鎌倉時代の僧道元が中国（宋）に渡った際、馬毛の歯ブラシは不浄で仏法の道具ではないとの理由で日本に持ち帰らなかったことが理由とされています。

日本では房楊枝の歴史が長く、庶民の間では楊枝の言葉が根付いていたため、明治末期まで歯ブラシを歯楊枝（はようじ）と呼んでいました。ちなみに京都の八坂にある女性に人気の油とり紙で評判の「よーじや」は昔、房楊枝を売る楊枝店で店名として残っています。そして楊枝専門店「日本橋さるや」は創業三百年の江戸時代から現在も続く老舗として有名です。

戦後、高度経済成長とともに歯ブラシはヘッドの大きさや柄の形、毛の材質など様々な進化をとげ、現在のようなプラスチックの柄に、毛の材質はナイロンやポリエステル素材などの化学合成フィラメントが主流ですが、最近は環境問題の観点から、昔ながらの豚毛などの天然毛や竹の柄の歯ブラシも見直されつつあるようです。

さて、これは余談ですが、十数年前、とあるご年配の男性から「ライオンの歯ブラシがいいらしいけど、どこ探しても見たことないんだよね。どこで買えるのかね？」と相談されたことがありました。私は「どこでも購入できるはずですよ」と答えましたが、その方は「そうかなあ」と怪訝（げげん）そうに首をかしげていました。その後、しばらくしてあることに気付きました。その方が探していたのは某歯ブラシメーカーではなく、実際の動物のライオンの天然毛の歯ブラシがあると勘違いしていたのだと。



房楊枝

小林富次郎、よはひ草 第二集、江戸の楊枝店 24～30、1929



昭和初期頃の日本製歯刷子

骨の柄に豚毛が使用されています

【歯科口腔外科診療部長 今井 正之】



